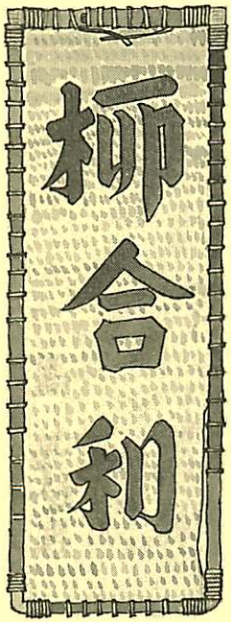
老舗の街・尾張町シリーズ１８

尾張町を支えた女たち　その七

蓆座の上にゆっくり座ったこともないままに



表紙絵　　村上隆氏（村上洋品店社長・尾張町商店街振興組合副理事長）

目　次

はじめに …… 1

大所帯の賑やかさ …… 2

商いを目のあたりに見て …… 4

うちの人の仕事風景と店番など …… 5

〝莫座〟について知ったこと …… 8

体の息災こそが一番 …… 10

一九席と尾張町の電車 …… 12

神さん棚に毎朝お参りして …… 14

もっとせっせと頑張るまし …… 16

孫が社長になって、昔のことも大事にしてくれる …… 18

あとがき …… 21

はじめに

〝商い〟は、〝飽きない〟の心意気を持ってするとは聞いていたけれど、気持を支えるものは体。それも単に力が強いとかいうことでなくて、健康であっていつでも気力を充実させられることが大事なのでしょうか。

尤も、縁あって尾張町の商売屋に嫁ぎながら、店の手伝いや奥の仕事に追われっぱなしで、その商売に対する利便性を充分に味わえない時期があるのも、また事実だと思います。外向きの姿だけで判断すれば、気力が空回りしているように見える訳です。

昔のことわざにも、『紺屋の白袴〔はかま〕』と言われる話があります。染め物を生業とする紺屋が、その道の専門家であるにもかかわらず、お客様のためばかりに染め物をしていて、ついついその忙しさのために自分の履いている袴をすら染める暇が作れない。だから、紺屋という染め物屋をしていながら、その素晴しい染める技術を自分のために使うことも出来ず、いつまでも染める前の白い袴のままだという風情を表現しているわけなのですが。

これを、いつでも出来ると思っているうちに、結局いつまでも手づかずで何もしないままに終わってしまうという、マイナスの意味で捕らえてしまうのか。

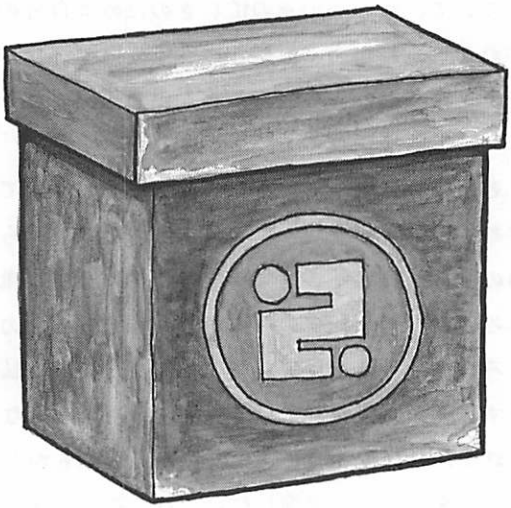
逆に、染めものの色を一滴もその白い袴に付けまいとする職人の技術的なこだわり・誇りであるという、プラスの意味で捕らえてしまうのか。

やはり、常日ごろ商売の原点を見失わないでゆこうとする私達なら、選ぶ意味は決まっています。例え、人がどう見ようと、本当に必要なら自分の姿も顧みずに頑張る。それが、今回のように茵座屋に嫁いだにもかかわらず、ろくに茵座を温めることが出来なくても後悔しない。むしろ、一束でも売れて、お客様に満足してもらえるかも知れない貴重な茵座の上にどうして安穏として座っていられるでしょうか。

尾張町商人を支える意地の中に、時代を超えて聞こえて来るような、どんな生き方があったのでしょう。しばらくの間、ご一緒に耳を傾けてみたいと思います。

大所帯の賑やかさ

何をカサダカナ(大げさな)こと言うとるがや(言うのか)と、思われるかも知れんけど、嫁に来たこの家にはいろんな人がおったわ。商売屋やさかい、そりゃ奉公人もおるやろし、それなりに人も多いとは覚悟しとったけど、そんなんやない。何んというか、身内のいろんな人が、それこそお舅さんの兄弟の家族とか、主人の兄弟とか。これが、荷車に積んである嫁入り道具を降ろし、タイソウナ(立派な)車から花嫁姿で出て来た時に目に入ったことかね。ちょうど、金石電鉄が涛々園線を開通させた賑やかな年(昭和7年)でもあったし。



その代わり、金沢一番の老舗が並ぶ尾張町の本家の茣座屋から独立したアジチ(分家)の店だけに、商いはコヂンマリと(小さいなりにまとまって)していて、見回しても身内だけでやっているようやった。

実家が河北潟のすぐ側で農業をしていて、６人もの兄弟に囲まれた家庭に生まれていたさかい、家族が少のうて寂しいよりも賑やかな方が良かったけど。

今は、チョコット(僅かばかり)の子供と夫婦だけの家庭が多いようやけど、大所帯は大所帯なりに皆んなで助け合あっていかれて、結構いいところもあったし。それに、あの頃はたくさん家族がおっても、なかなか長生きする人が少なかったもんで、多くいるのが当たり前やと思うとったわ。

そやかて、あっちでもこっちでも、いつでも話し相手がいて楽しいがいね。一人だけで、誰もいないと、考えんでもいいことを思うたりして、心が疲れるみたいやし。体をせっせと動かして、余分なことを考えんとしている方が、なんぼか心がすっきりするわ。

嫁に来る前は、学校へ通うたりしていてこの界隈に来たこともあるけど、端からちょっと見るのと実際に住んでみるのとでは、全然違うもんや。思うとった以上に、賑やかで落ち着かんもんや。農家では夜うさりになると、回り中が真っ暗になってしもうもんで、特別に用事がないかぎり外へ出ることはないし、また何も用事があるはずもなかったし。

それが、尾張町のこのお店に来て驚いたことに、夜うさりになっとるはずなのに、何んやかんやと人が歩いていることや。やっぱり、町ん中なんやなあ。それに、すぐそこにお城の石垣がどっしりとあって、近ずくと思わずしらず神様の前でもないのに頭を下げたくなるようになるし。

小さい頃に、実家のじっちゃんやばっちゃんから金沢へ出るのに、何んでか知らんけど「〝おやま〟へ行く」と聞かされて、大袈裟なことを言うとるなあと思うとったのに。やっぱり、ここは生まれた処とは違うもんが残っとるみたいや。

特別に信心深いという程でもなかったけど、ずう〜っと小さい頃から、南無阿弥陀仏と唱えて手を合わせていた、あの相手さんが、この〝おやま〟なんやて。前田のお殿様が加賀に来る前に、農家の皆んなが力を合わせて百年もの間、南無阿弥陀仏をお守りしていた〝おやま御坊〟というもんが、あの石垣の処にあったさかい、今でも金沢へ出ることを「〝おやま〟へ行く」というんやて。

ようは、そんな昔からずっと、この付近はいつも人がたくさん集まっていたことだけは確かなようや。私みたいなもんが、これから本当に家を守っていけるんかしら。ちょこっとだけ弱気になったけど、くよくよ考えるよりもまず体を動かさな。することは何んぼでもあるさかい。目の前には、うちの人、お舅さん、お姑さん……と、いっぱいおることやし。

商いを目のあたりに見て

身内だけで商いしていると、一人で何人分もの仕事をせなならんもんで、忙しさはひとしおや。幸い、本家からの老舗としての長い歴史があるもんで、お客さんには不自由せんかった。けど、いくら忙しいからというて、お客さんの頼みを断わったらお終まいや。自分の都合でのうて、お客さんの都合に合わせることが肝要なんやし。

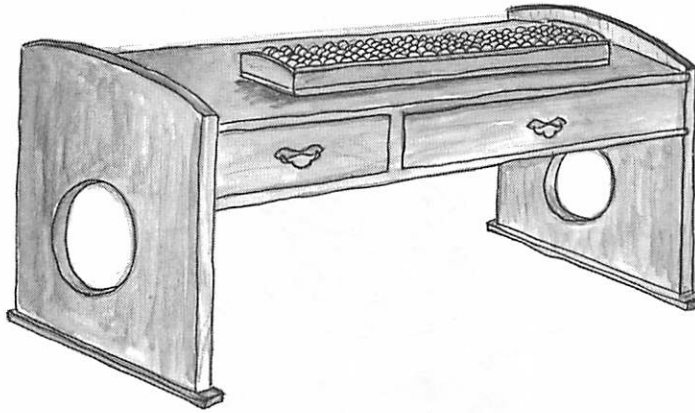
右も左も分からん小娘ならいざ知らず、二十歳の後半になってからゆっくりめに嫁に入ったから、世間の常識からして、その辺のことは少しは知っとった。けど、農家のようにその日その日のお天道様の様子だけを案配しながら、汗を流し、田圃を耕して〝一所懸命〟に頑張るのと違い、いろんなことを考える人間様を相手にするのでは全然違うことやった。

というて、他人様の言うことばかりを聞いていたんでは、こっちがせなならんことが進まんし。ころあいというんか、駆け引きとまでいうとずる賢くなってしもうて厭やけど。こんなに気を使うのも、やっぱり商売屋だからやろ。何も考えんと体を動かすんと違うて、気配りを大事にするのはシンジリマンジリ(じっと辛抱強く)することや。慣れん内は、これまでと使うたことのない筋肉を動かすようで、訳もなう肩が凝るようやった。

小さい頃に親に教えられた生活から、何んでも物事をハンチャボ(中途半端)に出来ん質[たち]で、するなら最後までせんと気が済まん。男勝りではないけど、女としては元気すぎるんかいね。

家の人に対してどんだけ色気があったか、気恥ずかしゅうなるけど、やっぱり店の商売あっての物種や。隣近所のことに目移りして、ちやほやされること

にばっかりアイソラシイ(かわいらしい)顔をしてたんでは、陰で何こそ言われるやら。何が一番大事か、きちんと自分で弁え[わきまえ]とかんと、それこそ魂のない、心のこもらん商売をすることなってしもうし。



単に、物の売り買いだけやったら、ちょっとでも安い店へ行くのが心情やから。うちらは生きた商売をすることで、生きた銭を稼いでこそ何んぼの商売かとうことに体を張っとるんやさかい。

うちの人の仕事風景と店番など

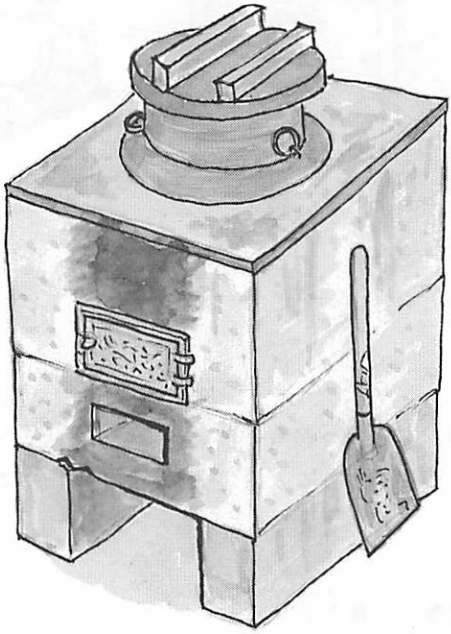
あの頃は、岡山あたりの産地から送って来た莫座[ござ]を、金沢の畳職人さんに捌くというた、問屋みたいな仕事が主やった。

チリンチリンと電話が掛かって「畳を○○梱[こおり]配達してぇ～な」と言われると、うちの人が自転車に乗って配達に出掛けてたわ。それも、荷台に山の

ようにたくさん積んで、あっちのお客さんの分、こっちのお客さんの分と、積めるだけ積むもんで、自分が座ってペタルを漕ぐ場所がないくらいになる。

「もうちょっと加減せんと、往来を走っても前や後ろが見えんようになるさかい、気をつけて」と言っても何んも聞いてくれん。まだ、今ほど道も混んでないから良いようなものの、待ってる身にとっては何かあったらと、こっちはハラハラしてしもう。

そんでも、お舅さんに言わすと、「一昔前は天秤棒に担いで回ってたから、息子は楽をしとる」 なんて、かえって文句を言われる程やった。やっぱり、私等の気のつかん内に、世の中はだんだん便利になって来とるんやね。



そんなお舅さんと私が交替で店番をしながら、少しずつ商売の雰囲気に慣れさしてもらう一方、お姑さんからは炊事・掃除について教えてもろうてた。まず嫁として最初に大事なんは、朝起き。これは、実家で充分慣れていて、５月

の田植時期なんかは4時に起きていたもんで、5時頃に起きるのは何んも辛くなかった。

ただ、田圃仕事で鍛えられすぎていたんか、ついつい女としては力が入りすぎるんかね。「ほうきはもっと丁寧に、塵やほこりを巻き上げないようにゆっくりと」と言われて、力の加減を覚えるのが一苦労やった。

わけても、茵座屋に藁がつきもんで、それがちょっと勢い良くほうきを使うと、ふぁ〜っと舞い上がって店中ワヤクチャ(めちゃめちゃ)になってしもうし。何しろ、産地から送って来る荷物がみんな、藁で包んだ上に縄で縛ってあるもので、掃いても掃いてもそこらじゅうに残っとるさかい。

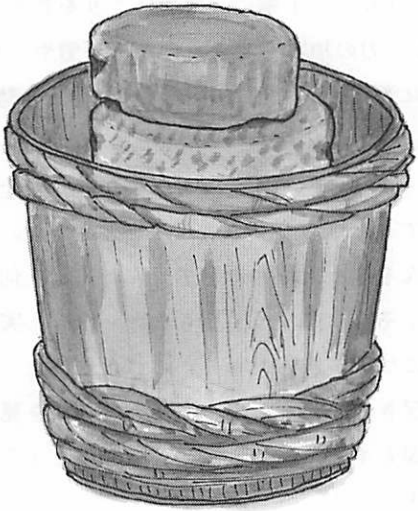
その代わり、ごはんを炊く火種には苦労せんかった。何しろ、どんだけでも藁があるさかい、薪をそんなに使うこともなかったし。実家も農家で、生まれ落ちてからずっと藁には縁があったから、これだけはとっつき易かったわ。そりゃ、藁はすぐ燃え尽きてしまうので、ずっと釜の火を見ていなきゃならんし。大変やけども、1時間もすると薪じゃとても味わえんような、楽しみなほどの美味しいごはんが出来上がる。

町内でも、住み込みの奉公人の居る店では、おかゆなんかを出し、家族は別にごはんを食べてた処もあるようやった。けど、ここの店は身内だけやから、そんなこともなくて、皆んなで一緒なごはんを食べてた。

朝は、ごはんとお漬物。昼になると、煮物とおつゆが増え。夜は、それに魚なんかを付けたりして.....と、毎日の献立を考えるのも大変やった。特に、漬物は三度三度に出して、何はなくても漬物だけは、という家風やろ。ちょっと味が浅いと、すぐにお舅さんから「この家へ来てドンダケ(どれだけ)になるんや、いつまでもグズして」と、やかましくいわれたし。

負けん気が強いもんで、そんならと漬物石の重いのを2つも乗せて、漬かりを良くするようにしたもんや。こればっかりは、お舅さんもだまって口を出さんかった。漬物桶が、ダイコン用のもの、キュウリ用のもの、ナスビ用のもの、白菜用のものとか、それぞれに用意するほどにこだわっていたので、桶の数も6つも7つもあって、漬物石を運ぶだけでも大仕事。でも、皆んなに美味そう

に食べてもらえると嬉しかった。



口ではなんだかんだ言っても、要[かなめ]は良い商売をして家族揃って満足な毎日が過ごしたいんや。こころは、このお店と一緒にあるんやし。

今は、プラスチックの桶に、ちょっと見に恰好の良い重しを乗せて漬物を作れるようになっとるけど、何んやら味がショムナイ(味が薄い)ような気がする。木の板で作った桶に、重い石をどっしり乗せた方が、漬物にとっても息をしているのか、味わい深い気がするのは考えすぎかね。

世の中便利になるのはいいんやけど、外見[そとみ]だけでのうて、中身もちゃんとくっついて来ることを願うだけや。

〝茣座〟[ござ]について知ったこと

嫁に入る前なら、〝茣座〟のことを知らんでも良かったけど、一旦ここの店

の人間になってしもうたら、そんな訳にはいかん。第一、注文をもろうた品が何か分からんかったら、せっかく電話を受けても、うちの人にあやふやな説明しか出来んし。

尾張町の他の店のように、赤の他人の奉公人の前で恰好つけるのも大変やけど、身内の前でいつまでも〝莫座〟について覚えんかったら、それこそ〝三下り半(離縁)〟もんや。実家がいくら農業で、材料の藁に親しんでいたといっても、それとこれとはまた別のことやし。

暖簾[のれん]にも、『莫座屋』と染め抜き、看板には〝畳表・縁布・花莚[はなむしろ]・指糸〟といっぱい書かれてるのを見ると、しばらくため息をついて……。その他にも柔道用の畳まで扱っていたんやけど、思い悩んでばかりもいられない。考え事をしているだけでは、物事はちっとも前に進むものではないし。難しい理屈を先にするよりも、まず体を動かして覚えればいいだけや

さかい。

毎日の生活を見回しても、茵座や畳は欠かせないものだし。そりゃ確かに、昔、昔、ず〜っと昔。特別な人が住む家が、農家なんかのように土間でのうて床が板張りやった頃には、高貴な方だけが座るのに茵座や畳が使われていたこともあったと聞いてた。湿気を吸い取り易い畳は、やっぱり一番気持が良かったんやろね。縁布の色や柄は、そうした方の位を区別するために使っていたとか。けど、畳表に使う茵座はそのままやと縁がムタムタ(むちゃむちゃ)になってしもうから、まず最初に糸で束ねんと何んにもならん。この糸がしっかりした上に縁布を付けると、見た目にもキチンとなるさかい。

私も、表からは目立たんでもいいし、ここの店の束ね糸になれたら、少しは嫁に来た甲斐もあるかも知れん。

体の息災(健康)こそが一番

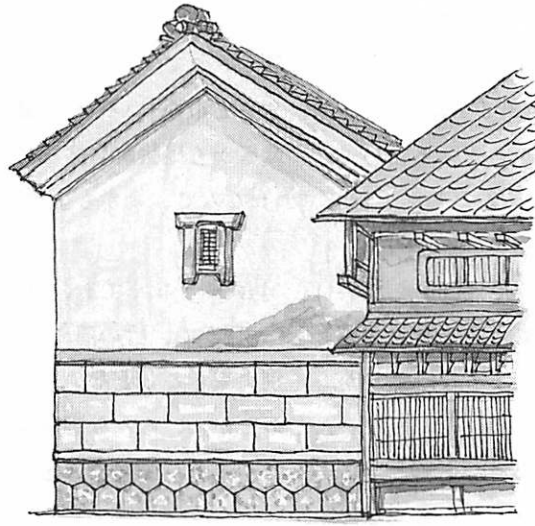
普段、何も特別のことがない限り店は夜の１０時まで開いていた。お舅さんや、うちの人は、明日の仕事のために、さっさと寝ればいいけど、女の私はそうはいかない。細々とした後片付けやら、繕いものやら、何やかやとすることがあって、どんだけ早うても１２時を回ってしまうのが常やった。

そうして、ちょこっと眠ったかと思うと、もう朝の５時から炊事に掃除にと動き回る訳や。つくづく、丈夫な体にして産んでくれた実家の二親のお陰ならこそと思う。これも、後になって自分が人様の中に入ってから気付く親への感謝なんかね。

いうてみれば、決して自分だけで世の中を生きている訳やない。実家の親やら、嫁ぎ先の親、うちの人、子供たち、お得意先や仕入れ先、ご近所さんに、知らず知らずの内に〝生かされている〟んやろね。私が、私が、とただ闇雲にしゃしゃり出ることよりも、皆さんがあっての私やと感謝して、肩肘張らずに素直な自分になるだけや。

茵座屋に嫁いで来て、それこそ茵座が暖まる程ゆっくり休んだこともなかったけど、〝こころの息災〟さえあれば何もいらない。私の回りには、こんなに

たくさんの人がいてくれるんやし。せっかく尾張町で商いする手伝いをさせてもろうとるんやから、毎日毎日を大事にして、私の出来ることを精一杯まっとうせんと、それこそバチが当たる。



店先からセド(中庭)、奥の倉へと通り庭を、一日に何回となく行き来したことやろう。体を動かして動かして、ちょうどコマを力一杯に回したら、その勢いで止まっているように見えるけど、あんな感じなんかね。かえって、こころのゆとりが生まれてくるようやった。

それに、忙しいはずの商売屋なのに、セドと倉の間に不思議にお茶室があるんや。前の人が作ったもんやけど、本店から独立して買った時に、普通やったら潰してしまって他の部屋にしてしまうはず。なのに、キチンと残してあるもんで、ほっとした気持にさせられたわ。

そりゃ、商人やさかい、まずお金を儲けなならんけど、そんだけやったらア

イソムナイ(情け無い・寂しい)ことや。銭、金というた形にならんでも、やっぱり生身の人間やさかい、こころの畑を耕すようなことをしとるんと、せんのとでは大違いや。謡や清元を習うたりする人が多いのも、そんなことなんかね。ここは尾張町の商人町やと思い起こさせられる。

一九[いっく]席と尾張町の電車

尾張町に住むようになってから人に聞かされて気が付いたんやけど、私の生まれる前の年(明治37年)になって、やっと市姫[いちひめ]通りが開通したんやて。江戸時代からずっと長いこと、武蔵から尾張町に来るには、十間町[じゅっけんまち]や袋町をぐるっと回っていたなんて。よくも辛抱出来ていたと、感心する。

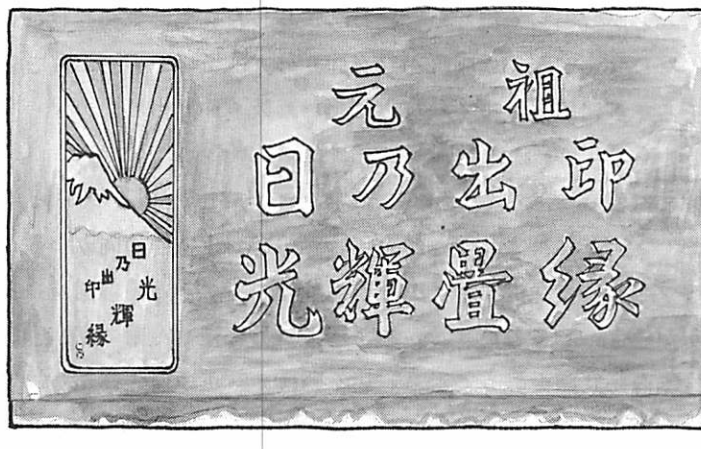
そやけど、金沢では「曲がり真っ直ぐ」(直線でなくても、道なりに曲がりくねって行ければ真っ直ぐだとすること)と言うて、目の前にお城が見えてもなかなか辿り着かんような町並やから、別に驚くこともないし。前田のお殿様が簡単に敵に攻め込まれんようにしたためとか。いろんな理屈はあるけど、袋小路(行き止まり)の道があちこちにあってもそれが普通やと思うとった町の人が、こんなに一杯おることも本当なんやから。

でも、スッキリと道が通れば、便利なことはこの上もないし。大きな火事があったのを機会に道が通ったらしいけど、第二次大戦でバクダンが一発も落ちんかった町だけに、なかなか新しい道が出来んのは仕方ないんかね。こじんまりと落ち着いている方が、私らはかえっていいけど。

大正も8年になると、市電が開通して、最初に金沢駅前から市姫通り、尾張町を通って上胡桃町の電車車庫まで走るし。だんだん懸造り(橋場町界隈)から、駅・武蔵の方へ目が向いて行ったことも確かみたいや。

それでも、長年の愛着があるのか、何かことある時は浅野川へしっかりとこころがつながっていることは間違いがないようや。昭和5年に市立図書館が殿町に開館したり、日本放送協会がＪＯＪＫの声を殿町で上げると、みんなで喜んだり。と、嫁に来る前は、ここらはちょっとした文明開化の騒動やったらし

い。



表通りを見回すと、向かい裏には第四福助座があったり、長生殿の大店のお菓子屋さんが目の前にデンっと構え、すぐ隣にハイカラ洋品店が二軒もあったし、賑やかな一九席の寄席もあった。確か、大阪から来た竹本一九という人が開いた寄席で、江戸時代の有名な十辺捨一九にちなんで付けた芸名に由来しているとか。

娘時代の頃の友達が、「あんなに良い処に住んで羨ましい」なんて言われたけど、そんなもん、見に行く暇がある訳やないし。余分なことを考えとる間に、せなならんことはどんだけでもあったし。やっと、能登から遊びに来た友達に、それも先方に無理やりに連れられるようにして入ったくらいや。

子供達が大きくなって、やっと少し落ち着いてご近所を見直すと、いつの間にか一九席の旗も降り、カフェになり、タクシー会社になり、今は佃煮屋さん

のビルになっとる。そういえば、お城の大手門の前の中町通りで分けられている尾張町の、上尾張町の方の第二菊水も昭和劇場という映画館になったんは、結婚して5年目(昭和13年)やった。あそこも、今では無くなって違う建物になっとる。

いろんなことが変わって行くけど、しっかりした商売の気持だけはいつの時代でも同んなじなんかね。尾張町の顔見知りの人は、今でもちゃんと店を開いていて、そろそろ隠居し始める私等には良い茶飲み仲間やわ。

神さん棚に毎朝お参りして

この店は、よっぽど神さんとご縁があるんかいね。通りの向かい側の小路をまっすぐ突き当たると久保市神社の社があるし。ちょうど表参道を挟んで、神社と店が向かい合ってるというんか。毎朝、一番に神さん棚に初水[はつみず]をお上げして商売繁盛を願うてから、店を開けて、正面の久保市さんに手を合わす。

「今日も一日、商売が繁盛しますように。家中が、皆んな息災[元気]でありますように.....。」

取り立てて形式張ったことをせんでも、日々の商いに感謝して、自然に手を合わせることだけ。難しいことは知らんけど、信心というんはそんなものかね。無理矢理に人から押し付けられたことは、やっぱり長続きせんし。お舅さんが亡くなってから、当たり前のように初水と柏手を私がするようになってたけど、それも後になってから気付いたこと。嫁いだ家を守らなならん、との思いがそうさせたんかね。

お盆になると、ご先祖様が眠る小立野の宝円寺さんへ搬って行く。金沢は新盆なんで、7月の初夏の頃だから、ちょっとのことで汗もあんましかかんで助かるわ。でも、梅鉢の紋の付いた立派な山門や、鳥居のあるお墓があったりと、前田のお殿様の代々の菩提寺だけの格式があって、何かしら改まった気持にさせられるお寺さんや。

この辺では、ほとんどが一向一揆の流れからか、今でも真宗が盛んで、それ

こそ石を投げれば真宗のお寺に当たるといわれるほど。けど、この宝円寺さんは数少ない禅宗になるんや。昔から武家はどういう訳か禅宗が多かったというけど、そのとおりなんかね。

本家の出が、石動［いするぎ＝富山県小矢部市］で士族をしていたというし。古い屋号も〝いするぎ屋〟と名乗っていたとか。明治維新までは、加賀藩ちゅうたら、石川県と富山県の区別ものうて、両方にまたがっていたんやから。同じお殿様にご縁を持っていたことになる。

そういえば、誰から聞いたか思い出せんけど、お殿様の町作りは、一向一揆に縁がある真宗のお寺を見通しの良い浅野川と犀川に挟まれた中心部に持って来て、信頼できる武家のお寺の禅宗や、前田家として信心した日蓮宗のお寺は、外回りの卯辰山や小立野台地や寺町台地に持って行ったとか。出来すぎた話のように思えたけど、尾張町という町の真ん中に住んでみて、回りを見回してみ

ると、「ソウケソウケ（そうかそうか成る程）」と感じるから不思議なもんや。

もっとせっせと頑張るまっし

することをしようと思うたら、口は後回しにせなならんもんや。理屈だけで食べられるもんやなし、体を動かして仕上げたことは、理屈で通す道よりも、よっぽど真っ直ぐな道になっとるんやないかいね。

わき目も振らんというたら言い過ぎかも知れんけど、〝一所懸命〟に頑張る時には、そんなにあっちこっちへ目が行くはずがないもんや。近ごろは、どうでもいいもんが多すぎて、気ばっかり取られて目移りがしすぎる。電車でいうたら、途中下車ばっかりしてて、いつまでたっても終点に行き着かんようなものや。

そんな風潮を見ながら、仕事をするときはする、休むときは休む。たったこ

んだけのことなのに、何で皆んながしないんやろうとハガィシイ(物足りない)思いをする。

「女は三界に家なし」という古い例えではないけど、私も自分の寝る場所がなかなか決まらなくて、家中あっちこっちと動き回ったもんや。そりゃ商売がまず先やさかい仕方ないけど、仕入れの荷物がたくさん入った時なんか、倉に収まりきれない商品のためにいつもの寝倉は明け渡すんや。ショウコトナク(仕方なく)二階の柳梱[やなぎごおり]の隙間を見つけて眠ってみたり。離れの茶室の隅で横になってみたり、と落ち着かんことやった。

そやさかい、奥のこと、店番のことといって駆けずり回ってたあのころは、人を使ってないもんで自分の時間もほとんど作れんかったこともあった。町内にもあんまし顔出しが出来んかったけど、戦争中に隣同志で配給米を持ち寄って餅搗きをしたんが、数少ない懐かしい思い出や。古書店のおかみさんとも仲

良くなれたし。苦しい時、厳しい時に皆んなで力を合わせて何かをすると、本当にこころが晴れ晴れとするようや。

子供達の世話にしても、そんな合間を盗むようにして育てたもんで、私なりには精一杯のことをしたつもり。というても、世間様と比べるとどうかは知らん。充分なことは形としては出来なかったかもしれんけど、こころ持ちはたっぷり与えたはず。きっと私の気持を分かってくれて、せっせと仕事に家庭に頑張ってくれるはず。

体一杯に、お天道様が与えてくれたこの恵みは、どこのだれでもが同じにもらったものや。後は、自分がどんなふうにして使うかだけ。感謝に目覚め、自分の与えられた店を軸にして、世の中に少しでも役立つように心がけること。そうすれば、もっとせっせと頑張ることに、楽しみが出来てくるんやないやろか。

孫が社長になって、昔のことも大事にしてくれる

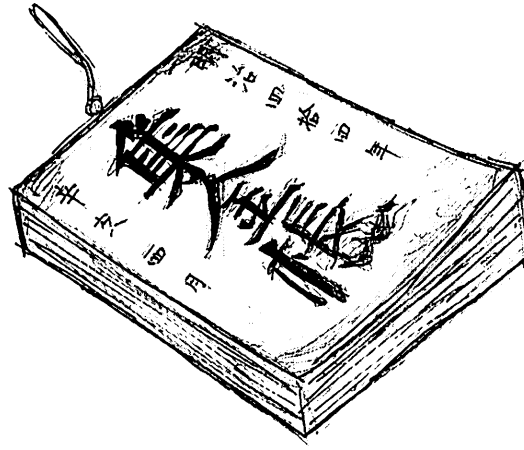
長いこと店屋の奥を切り盛りの手助けをしているうちに、いつの間にかこの店も会社になったし、とうとう孫の代になった。長かったようで短い間を振り返ると、ひとしおの感慨になる。して来たことには、何も後悔するすることもないはずやと思う。店の名前も莫座屋から敷物店、そうして片仮名になってと、時代に合わせて店の扱いも変わったけど、こころ粋はずっと同じではなかったやろうか。

こころ粋の〝粋[いき]〟は〝意気〟に通じるし、〝生き〟の力の基になるんやと思うし。生き甲斐は何んやと言われたら、この店の商いを通じていろんな人に出会うことが出来て、ほんの少しでもいい、何かしら人様のために役立てる機会に恵まれたことかも知れん。

そりゃ商売やから、日銭が入って来んことには仕入れの支払いや、家族の明日からの生活に困る。けど、店の都合ばかりを先に出して銭勘定ばかりを表に出していたんでは、この店の商売そのものが長続きせんような気がする。肝心なのは、お客さんに満足して喜んでもらうこと。どういうふうにしたら、お客

さんの気持を分かることが出来るかしら。

今まで続いて来られた店ということは、それだけお客さんから店としての価値、痒いところに手が届いているから丁宝してるぞとの証[あかし]をもろうたことでないやろか。いうたら、商売を続けて行っても良いとの通行手形をもろうとるようなもんかね。



尚更のこと、お客さんあっての物種と、深く感謝するしかない。ちょっと見には回り道のようやけど、お客さんのためになるように努力することが、結果としてお金になってくる。そしてそれを伝えて行ってくれる、新しい世代がこの店には居る。ありがたいことや。尾張町全体を見回しても、確かに古い歴史のある街であるはずなんに、不思議にうちの孫のような若い世代の姿をあっちの店でも、こっちの店でも、結構見掛けるみたい。

一時は、戦後にお城の中の七連隊に代わって金沢大学が作られ(昭和２４年)

て、お城を中心に大きな商いをしていた商店の力が弱くなって行ったり。また昭和４２年に問屋団地が完成すると、ほとんどの商いが卸しの何軒かは尾張町から抜けて行ったり。寂しい感じになったけど、逆に今は残る店は残っているみたい。勿論、商いの〝こころ粋〟も忘れずに残しているようやし。

「おばあちゃん、今度はね」と、何かにつけて孫が商売のことについて声を掛けてくれると、胸が熱くなる。先日も、足がもうろくしている私を車に乗せて、新しく建てた倉庫のビルを真っ先に見せてくれたし。今度は、商店街の店の中で去年から作り始めた〝店の前に昔から伝わる商売道具やらを飾る場所〟を、うちの店も作るので、是非話を聞きたいと言うて来たし。

今あることが、ご先祖様と、昔からのお客さんのお陰やということを忘れんことは、本当にいいことや。昔を大事にすることが、きっと今の良いことにつながっとるんやろね。

高橋スズ・媼(おうな)について

明治三十八年十二月二十八日生。昭和七年に高橋茵座屋に嫁ぐ。母屋より独立したばかりの舅と夫を助け、持ち前の明るさと健康さで店の奥を切り盛りして家業の発展に尽くす。

あとがき

「私なんか、とてもとても」、と言いつつも話を聞かされていると、何故かそのうちに温かさとともに、不思議な尊いものを感じて来る。商人の妻として、店の表からは見えない奥の切り盛りは、口で言う以上に辛いものであるはず。特に、老舗の看板を背負っている限り、長年に渡る店独特の慣習があってみたりして尚更のはず。なのに、しかめっつらどころか、にこやかな笑顔が満面にこぼれているのです。顔艶も良く、一回りは若く見えます。

「顔で笑って、こころで泣いて」という言葉がありますが、あれはまだまだ肩肘張って無理している姿に見えるものです。けれど、この話をしている時の姿はそんなことにもこだわらず、まったくの自然体なのです。妙な影もない。

あるがままを受け入れ、あるがままの中に精一杯、この所に自分の生き場所を見つけて〝一所懸命〟になる。狭い見方の中で自分を卑下することなく、のびのびとしてこだわりを超える、とでもいうのですか。そこでは、喜びすら感じているように思えるのです。

経済という字は、〝経世済民〟(世を治め民を救う)の略とも聞きます。いわば〝人〟が主体な訳です。どんなに情報が発達しようが、どんなに社会が複雑になろうが、やっぱり〝人〟なくしては中心が空洞になってしまうのではないでしょうか。

〝人〟を忘れなければ、〝人の「こころ」〟を忘れなければ、〝まず人様のお世話〟を忘れなければ、時代の移り変わりに対して目を奪われることがないのでは……。例え、目に見えるモノの形は時代と共に変わっても、目に見えないモノ(人の「こころ」)は変わらずにいて欲しい。

尾張町は、金沢の中では古い歴史を持つ街かも知れないけれど、代々の商人はいつも若々しい気持を持ちながら、同時に受け継がれて来た〝こころ粋〟を大事にしている街であり続けたいと願うのです。

今回の盃の話の中に、そんな尾張町に住んで商いしている私達の姿が、少しでも皆さんに感じてもらえれば、と思います。

《《 さし絵の説明 》》

項　　目	内　　容
o 表紙	「茵座で作った看板」
<目次>	
o 大所帯の賑やかさ	「提燈を入れる紋付きの木箱」
o 商いを目のあたりに見て	「ソロバンを置いた和風机」
o うちの人の仕事風景と店番など	「ごはんを炊くかまど」
〃	「重し石を２ケ載せた漬物桶」
o ″茵座″について知ったこと	「千石船に積まれた茵座の引き札」
o 体の息災こそが一番	「奥の倉」
o 一九席と尾張町の電車	「日乃出印の畳縁の看板」
o 神さん棚に毎朝お参りして	「宝円寺の仁王さん」
〃	「宝円寺の鳥居のあるお墓」
o もっとせっせと頑張るまっし	「ハンテン」
o 孫が社長になって、昔のことも大事にしてくれる	「集金帳」
o 裏表紙	「たたみと書かれた吊りパネル看板」

発　行＝１９９４年９月吉日
著　者＝石野　琇一
さし絵＝村上　隆
発行所＝金沢市尾張町１丁目１１番８号
尾張町商店街振興組合
尾張町若手会